

第 1 回京都市総合計画審議会
議事録

日 時：令和 6 年 1 0 月 9 日（水） 1 8：0 0～2 0：2 0

会 場：京都市役所 4 階 「正庁の間」

出席者：

1 委員（五十音順、敬称略）

赤松 玉女	京都市立芸術大学学長
安保 千秋	弁護士
小川 さやか	立命館大学大学院先端総合学術研究科教授
阪部 すみと	Tsunagary オフィス合同会社最高執行責任者
鈴鹿 可奈子	株式会社聖護院八ッ橋総本店専務取締役
曾我 謙悟	京都大学公共政策大学院院長
高屋 宏章	社会福祉法人京都市社会福祉協議会会長
田中 成美	市民公募委員
貫名 涼	京都大学地球環境学堂助教
濱崎 加奈子	公益財団法人有斐斎弘道館館長／ 京都府立大学農学食科学部准教授
福富 昌城	花園大学社会福祉学部長
藤野 敦子	京都産業大学現代社会学部教授
プラー ポンキワラシン	市民公募委員
牧 紀男	京都大学防災研究所教授
松井 道宣	一般社団法人京都府医師会会長
宗田 好史	関西国際大学国際コミュニケーション学部教授／ 京都府立大学名誉教授

2 特別委員

野村 将揮	ハーバード大学デザイン大学院／京都哲学研究所／ Yamauchi No.10 Family Office／京都大学成長戦略本部
-------	--

以上 1 7 名
（5 0 音順、敬称略）

1 開会

松井市長

本日御出席の委員の皆さまにおかれては、御多忙の中、また夜分にもかかわらず、市役所にお運びいただき感謝申し上げます。これから委員の先生方の御意見を伺っていきたいが、冒頭に一言、私から御挨拶する。

本日お集まりの各界の京都のリーダーの方々、そして市民公募委員の方々も含め、各分野について大変御造詣の深い方々にお集まりいただいた。本日の資料に京都市基本構想の冊子を付けている。表紙を1枚めくると、その当時の市長の挨拶の記載がある。1999年、平成11年の12月に策定したものが、ちょうど25年という時を経て期限を終え、次の基本構想、総合計画を作るというタイミングになる。

当時の市長の挨拶の右側に、「総合計画の体系」という目次のページがある。そこに世界文化自由都市宣言が記載されている。1978年、当時の市長をはじめ、いろいろな方々がこの宣言に関わっている。今は亡き梅原猛先生など、京都の文化人の方々のお知恵もいただいた宣言である。この宣言は京都市の憲法のようなものである。そして、1999年12月にまとめられた現行の基本構想は、鷺田清一先生が中心になり、何十回も推敲、そして審議会の議論を踏まえて、何十回も改訂されながら、当然、京都市会で議論をされて策定されたものである。その理念は今でも有効だと私は考えている。

しかし25年の時を経て、今京都を巡る、あるいは我が国を巡る環境も大きく変わっている。基本構想が策定されたのは20世紀末だが、20世紀は革命と戦争の世紀といわれる。20世紀末に策定されたこの基本構想には、本当に学ぶべき点が今も多く残っている。6つの得意技というのは、基本構想はもちろんのこと、鷺田先生の著書の中でも御紹介されていて、今も大切にしなければいけない京都市民としての誇るべき特質だと考える。

新世紀においても戦争の世紀は終わったと思っていたが、実は世界の中では今もなお戦禍に苦しむ多くの国々、地域がある。そして分断が世界の中ではさらに激しくなっている。社会の中でいかに分断、あるいは憎悪を取り除いて、そして包摂性のある社会をどう築いていくか。平和の価値をもう一回新たに噛みしめ直す時が現在ではないかと考える。

今の京都の状況を見ると、文化のまち・京都というのは世界的に名を馳せているが、その文化を、京都というまちをどのように磨いていくのか。市民の生活、京都というまちの社会の在り方。少子高齢化の波が京都にも忍び寄ってきていて、ここ数年、人口減少に直面している。市長就任以来、約20回、市民との対話の場を持ってきた。少子高齢化の中ではあるが、京都の特徴である市民の力、あるいはまちの力、そういった地域コミュニティの力は、少子高齢化

の中にあっても、特に首都圏等と比べるとまだまだ健在ではあるが、やや疲労の色も隠せない状況になっている。これだけ多くの学生の皆さん、学生を中心とした若者の住む京都のまちが、これから地域の力をどのように維持し、あるいはそれを高めていくのかということも非常に大きな課題だ。

私が常々申し上げているのは、基本構想の冒頭の世界文化自由都市宣言にあるように、京都というまちは、国籍、民族を問わずさまざまな人材を集めて、開かれた文化の中で、多種多様な価値観や文化を混ぜ合わせて、伝統に即した新しい価値を創造していくことができる唯一無二のまちだということである。そのまちを、どのようにこれから発展させていくのか。

京都市長に就任して7カ月余りであるが、様々な難しい課題がある。2年連続黒字決算であっても、財政は相変わらず厳しい状況で、様々な内外の諸課題をどう解決していくのか。そして課題解決だけではなく、市民の幸福の総和、あるいは市民にとってのやりがいの総和というものをどうやって高めていけばいいのか、その舵取りはなかなか難しい。様々な難題があり、例えば、国家としての幹線高速鉄道網の整備に対して京都はそれを受け入れて、どういう財政負担をするのがいいのかどうか。こういう問題一つを取ってみても、京都というまちは、どういうまちとして生きていくのかという価値観が問われていると私は思う。

人間に人柄があって、日本という国に国柄というものがある。その地域、そのまちの特徴はどういうものであって、限られた資源の中で、京都のまちは、教育、健康、福祉、文化、経済、防災・減災など、何を重点化して資源配分し、そして何を規制し、何を規制緩和するのか。その判断は、京都がどういうまちとして日本の中で、あるいは世界の中で生きていくのかという背骨がなければできないことだ。その時々、政治的な圧力や社会的な圧力などで流されていったら、京都というまちは長い歴史の中で、羅針盤を見失ってしまうのではないかと思う。

私が市長任期の最初の年に、次期の総合計画を策定するという大きなお仕事をいただいたことは天命だと思い、皆さま方の御意見をしっかりと受け止めた。この審議会の皆さま方は有識者で、市民公募委員の方もいる。審議会も大切だが、この審議会にさらにいろいろなインプットをしていただけるような場も作っていく。もう既に、先月、ウェブ上で様々な市民の意見、価値観を問うような場も設けている。

この審議会委員の皆さんと何らかの形でつながるような形で、若い世代の方々の御意見もしっかり集約できるような場も作っていく。当然のことながら、ここで御議論いただいた後、市役所としてしっかりと受け止め、京都市会にもしっかりと諮っていかねばならない。これからの25年間の背骨となる、京都

のまち柄を議論いただく。そしてそれを踏まえ、中期的には、市長任期の残り3年半で、どういう形で市民に対して、私が市民から付託を受けたことに対して答えを出していくのか。短期的には、令和7年度の予算をどのように組んでいくのか。短期、中期、長期にわたって議論の背骨をつくっていただく大切な会議である。私は「ぬか床」のようなまちと言っているが、全7回をかけて、じっくりと、この「ぬか床」を知ろうと思って御議論いただけたら大変ありがたい。どうぞよろしくお願いする。

司会（都市経営戦略監）

それでは続いて、改めてこの審議会で皆さまに御審議いただく総合計画について、簡単に御説明する。総合計画と呼んでいるが、これは市民の皆さまに対して、京都がめざすべき未来の姿、京都が持つ価値や強み、将来の社会の見通しと、それに対する備えなどを分かりやすく示し、共有していく長期的なビジョンとなるものである。今回の審議会では、市政に対する広範な知識と御見識をお持ちであり、この間、市政の推進や各種の分野別計画の策定などにも多大なご協力を賜っている各界、各層の方々に審議会委員への就任をお願いした。また、本審議会においては、次期総合計画草案の起草者である野村将揮氏を特別委員として選任している。

ここで、野村委員の御経歴を簡単に御紹介する。野村委員は東京大学を御卒業後、経済産業省に入省し、さらに京都大学大学院で哲学を研究され、修了された後、昨年のスタートアップワールドカップ世界大会で、約3万社の中から優勝した医療AIベンチャー「アイリス」の執行役員およびCCOを経て、ハーバード大学ケネディ行政大学院を修了されている。また、現在はハーバード大学デザイン大学院において、哲学とデザインの研究をされている。哲学思想をはじめとした人文知に明るいだけでなく、グローバルな視点での社会経済情勢、スタートアップに対する知見、将来にわたって価値や強みとなる京都市の特徴を表現する幅広い見識をお持ちである。次期総合計画の策定に当たり、草案を作成いただくとともに、審議会の議論にも御参画いただく。それではここで野村委員から自己紹介を兼ねて一言頂戴したい。よろしくお願いする。

野村特別委員

この度起草者を拝命した。よろしくお願い申し上げます。

私は平成元年に京都市で生まれ、その後、家庭の都合で一旦京都を離れたが、大学院進学を機に京都に戻ってきた。また、昨年、第1子が市内の病院で生を授かり、すでに市内に居を構えてもいる。

平成元年生まれなので、今年で35歳になる。25年後というと、私が60

歳になる年齢だ。末端の極みながら一応は人文学の研究に従事している者として、これからの25年を見据えると、恐らく「人間性の収奪」の波がさらに人類社会を覆ってくるだろうと見ている。そういった中で、京都市およびこの町で生きてきた人たちが紡いできた伝統や、これらが体現する思想や文化が担える役割は、おそらくとても大きなものになっていくはずだ。この課題意識と関心から研究に従事してきたが、この度、このような本当に身に余る大役を仰せつかり、光栄の限りだ。

おおよそ5年弱ずつ、省庁、AIスタートアップ、アカデミアと渡り歩いてきたが、5年などという期間は委員の皆さま方からすれば瑣末なものに過ぎないと自覚している。若輩者の極みなので、これから様々に御意見・御指南を賜りたい。よろしくお願い申し上げます。

司会（都市経営戦略監）

それでは続いて本日御出席の委員の皆さまからも、一言ずつ自己紹介をいただきたい。お名前と専門分野、活動分野等を一言程度でお願いする。それでは順番に赤松委員から、反時計回りの順番で御発言をお願いする。

赤松委員

京都市立芸術大学の学長を務めている。京都市立芸術大学に入った時から京都に関わってきた。特別な都市だと思っており、そして今は学長という立場で京都市立芸術大学を率いているので、芸術を育てる豊かなまちに、更になっていってほしい。どうぞよろしくお願いする。

安保委員

京都市内で弁護士をしている。ライフワークとして、私自身、子どもや若者が大好きで、子どもや若者の支援などの活動をしている。どうぞよろしくお願いする。

小川委員

専門は文化人類学、アフリカ研究であるが、まちづくり等に関連する研究をしている院生たちもたくさん抱えているので、今後ともよろしくお願いする。

阪部委員

普段の拠点は大阪市内だが、LGBTQに係る施策を、京都市と京都府下のいくつかの自治体と一緒に運営するほか、いろいろなフィールドワーク等をしている。どうぞよろしくお願いする。

鈴鹿委員

私は聖護院八ッ橋の社名のとおり、長年、京都企業に携わっているという面と、現在5歳の子供を育てている子育て中の母としての面で委員に選ばれたのかと思う。25年後が素敵なまちになるようにと思っているので、よろしくお願いします。

曽我委員

京都大学で公共政策大学院の院長をしている。専門は、政治学、行政学である。どうぞよろしくお願いします。

高屋委員

今年の6月から社会福祉法人京都市社会福祉協議会の会長をしている。私は生まれも育ちも右京区太秦で、地域福祉、また自治会関係、幅広く地域の皆さま方と手をつないで、いろいろな福祉を広めていく活動をしている。今後勉強させてもらうので、よろしくお願いします。

田中委員

本業は京都市に拠点を置いており、中小企業のデジタルマーケティングの伴走支援をしている。またキャリアコンサルタントとして、若者のキャリア支援や副業・兼業人材の育成などを行っている。どうぞよろしくお願いします。

貫名委員

普段は京都大学で森林関係をはじめとした自然環境について研究している。個人としては市役所近くの出身であり、祇園祭で囃子方をやるなど、ずっと京都市民として暮らしてきたため、そういう部分に関われるということがうれしくもあり、責任も感じている。どうぞよろしくお願いします。

濱崎委員

有斐斎弘道館という江戸時代の学問所において、建物や庭の保存活動をしているほか、京都府立大学では伝統文化、伝統芸能、そして食文化の研究をしている。どうぞよろしくお願いします。

福富委員

花園大学社会福祉学部の学部長をしている。専門は社会福祉で、特に介護保険のケアマネの研究などを行っている。右京区で生まれて梅津で育っている。どうぞよろしくお願いします。

藤野委員

京都産業大学の現代社会学部で教授をしている。労働経済学が専門だったが、本学は現代社会学部を創設して7年目で、その時に社会学に転向し、今は社会学、ジェンダーと少子化の問題などを専門にしている。私自身は京都市民20年目だ。以前はパリにいたが、京都とパリは近しい都市だと思う部分がある。フランスと縁もあるため、フランスの事情に触れる機会もあるかもしれない。よろしくお願いします。

ブラー委員

タイ出身で、日本には高校から留学し、京都には大学をきっかけに住んでおり、20年ほど京都市民だ。仕事は大阪にあるNPO法人CHARMという団体で、そこで日本人、外国人関係なく支援を行っていて、通訳としても活動している。この会議で少しでも外国人の立場として発言できればと思う。よろしくお願いします。

牧委員

京都大学防災研究所で災害の研究をしている。ここのところ地震、それから大雨といった災害が本当に多いので、そういったことを考えていくのが大変重要だ。京都生まれだが、和歌山で育っている。大学入学以来、京都にいたため、京都に住んでいる期間が長くなった。よろしくお願いします。

松井委員

京都府医師会の会長を務めている。京都市との関わりとして、「健康長寿のまち、京都」ということで、市民の皆さまと一緒に、健やかにどうやったら人生を全うできるかということの取組を進めている。医師会は病気を治すお医者さんの集まりではあるが、この少子高齢社会をどう乗り切るかということ、あるいは自然災害や新興感染症、こういう危機管理をどうしていくかをテーマにしている。よろしくお願いします。

宗田委員

京都府立大学に30年ほど勤めており、3年前に定年退職して、今は関西国際大学という私立の大学で、国際コミュニケーション学部の学部長をしている。留学生が多い大学で、その世話をしている。ちょうど世界文化遺産に古都京都の文化財が登録される時に、国際連合の職員をしており、その縁でお手伝いに来たのが京都市との最初の関わりである。当時は市街地景観整備条例もなかった時代だったが、その後に条例を改正し、世界文化自由都市宣言にあるように、

古い文化遺産と美しい自然景観を保持してきた。千年の都に単にあぐらをかくだけではなくて、世界遺産に登録された欧米の都市と比べても決して遜色のない景観政策とか、様々なことができるようになった30年だった。

2 議事

(1) 会長選出

司会（都市経営戦略監）

続いて議事の1つ目、審議会の会長選出に移る。資料4としてお配りしている京都市総合計画審議会規則第2条第2項において、会長は委員の互選により定めることとなっているので、ここで御推薦などがあれば受け付けたいが、いかがか。

牧委員

本審議会の会長に宗田好史委員を推薦する。宗田委員は先ほど市長がお話になった基本構想策定の時から御参画されており、現行の基本計画策定時には審議会の会長として御活躍をされた。その後もいろいろな計画の見直し等に関わっておられ、大変幅広い御見識をお持ちであるため、今回の審議会の会長にふさわしいと思い推薦した。

司会（都市経営戦略監）

ただ今、牧委員から宗田委員にという御推薦があった。その他にあるか。なければ宗田委員を会長に選出するということによろしいか。

——異議なしの拍手——

司会（都市経営戦略監）

それでは会長は宗田好史委員にお願いする。一言御挨拶いただきたい。

宗田会長

牧先生から御紹介いただいたように、この計画に長年関わっており、私がまだ30代の終わりぐらいだったころ、西島安則先生が会長を務めていた。化学の世界で有名な学者で、島津製作所の田中氏がノーベル賞を取った時の推薦書を書いた方であり、若い我々を大変盛り立てていただいた。私はもう68歳で、

これが最後になると思うので、若い皆さま方の発言、御意見を丁寧に承り、伺って、それをいかして良い計画にできるように、尊敬する西島安則先生のとおりになりたい。よろしくお願いします。

(2) 副会長の指名

司会（都市経営戦略監）

それでは続いて議事の2つ目。副会長の指名に移る。副会長については規則の第2条第2項において、会長が指名することになっているので、宗田会長に御指名いただきたい。

宗田会長

安保委員と曾我委員に副会長をお願いする。

(3) 諮問

——松井市長から宗田会長へ諮問——

(4) 資料説明

- 事務局から資料6「第1回京都市総合計画審議会資料」について説明

(5) 意見交換

宗田会長

まず2人の副会長の先生方に、これまでの総合計画が取り組んできた内容の振り返りと、次期総合計画の構成案に関してという2点を伺いたい。安保先生には、この京都市基本構想策定以降の25年間でどう総括するかということに関して、一言いただきたい。

安保副会長

世界文化自由都市宣言という哲学的で高い価値を掲げ、その後も京都の町の伝統と創造と、重層的なものを感じられる基本構想を掲げてきたわけだが、大きな各指標が改善されているところは、やはり京都市民の足元を見て取り組んできた成果だと思う。

また都市格、それから京都のまちに対する世界からのいろいろな憧れや期待

も大変高まっている。それについては、京都のまちの方にとっては普通のこと
をやってきて、京都市の行政がそれを支えてきたことに、世界の認識がようやく
追い付いてきたというのが、今の評価かと思っている。

京都市も少子高齢化等の中で、京都市の平野部の少なさなど、様々なまちの
制約がある中で、観光に来る方が増えることなどで地価も上昇し、若者、それ
から子育て世代が、なかなか京都に住めないという京都市特有の問題を抱える
ことになっているかと思う。

京都の強みというのは、学生がたくさん来て、文化だけではなく学問の都であることであり。京都の企業も、いわゆる京都の企業として尊敬される企業も多く、伝統産業も脈々と続いており、京都のまちの雰囲気はバブルの後も辛うじて保たれているところもあり、なおかつ多様性を含みながら続けているのは、大きな強みだと思う。これから求められている多様性にも十分応えられるまちではないかと考える。

地域の市民参加も、形を変えながら続いてきたのだと思う。社会経済情勢の
大きな変化がありながら頑張ってきたというのは評価できるところだが、大き
な社会経済情勢の変化の中で、更にもう進化させるかは、今回の長期ビジョン
に期待するところだ。

宗田会長

最後におっしゃった市民参加に関しては、鷲田先生たちの議論の中でも、信
頼を再構築することが必要だったというのが25年前の実態だった。当時はま
だ市役所と市民は対立していて、市民や様々な団体が市役所の施策、市長を批
判するということがもっと一般的だった。信頼を再構築するための手段が市民
参加推進であって、市民参加の様々な制度を作ってきた。

そういうことも踏まえて、資料6の中に挙げていただいたような、環境、観
光、福祉などのあらゆること、それからもちろん地域活動に関しても、信頼を
醸成してきた。今回もその上に立って、世界文化自由都市宣言を踏まえて、こ
れからどういう未来をつくっていくかという議論ができる関係ができてきた
ということが、一つ総括にあるかと思う。

では総括を踏まえて、本日の主題である次期総合計画の構成案について、曾我副会長から伺いたい。

曾我副会長

地方自治法の改正により、必ずしも自治体が基本構想というものを作る必要
がなくなり、各自治体で判断できるようになった。地方分権が進んだ今の時代
に、どのように計画を立てていくのかということは、自治体ごとに考えるのが

潮流となっている。そうした状況となってから初めて策定する長期の構想になるので、どういったものを作るかが重要だ。これは京都市だけではなく、全国の自治体が直面している問題である。

実際、8割ぐらいの自治体は、基本構想、基本計画という仕組みにしており、その中でも基本計画の下に実施計画を作るという三層の形を維持しているところが多い。よく考えた上で維持しているならいいが、どう変えるかの検討がつかないので結局維持しているという自治体が多い。長期的なプランを立て、それをブレイクダウンして実現していくという仕組みは、経済成長をしている時には確かにうまくいっていた。ただし、現在はかつてのような経済成長時代ではないので、今申し上げたような仕組みでは実態に即さなくなっている。

結局、基本計画は、財政状況を加味せずやりたいことを総花的に織り込んだものになりやすい。私たちの業界だと、基本計画を「お財布がない買い物リストだ」と揶揄することがしばしばある。実際には、予算の制約の中で収めなければいけないわけだが、5年ぐらいの基本計画になるとその制約が曖昧になり、様々な要素が入ってきて総花的なものになりやすい。正直に申し上げれば、今までの現行の京都市の基本計画とかにもそういった側面がなかったかと言われたら、やはりあったのだと私は思う。

仕組みを変えた自治体の中には、長期計画をなくしてしまうところもある。長期的に見通しが立ちにくいので、4、5年ぐらいの中期的な部分だけを作っていて、長期の部分は見ていないわけだが、その場合、縦割りになりやすいので、行政、市民、関係のある企業など、そういった部分を含めた縦割りをまとめていくためには、大きなビジョンが必要だと思う。

もう一点、市長が最初におっしゃった憲法的なものという点だ。短期で出来上がらないものとか、1人の市長の間には出来上がらないようなものを含めて目指すべきものは何かを考えようとすると、中期の計画だけでは足りないところがあり、25年などを見通した長期のビジョンが必要になってくる。また、長期ビジョンと毎年度予算だけでは行政運営は回らないので。ビジョンと毎年度予算をつなぐ仕組みも必要だ。

宗田会長

次期総合計画の構成について、京都市から御提案いただいたが、そのことに関して御意見をお持ちの方がなければ、当面、京都市の提案した方針で進めるということで会議を進めたい。

それでは次期総合計画の策定方針について、皆さま方お一人お一人から御意見を伺っていききたい。松井委員からお願いする。

松井委員

世界文化自由都市宣言は素晴らしい先見があったなと思う。おそらく普遍的なものなので、文化を創造し続ける永久に新しい文化都市であるというのは、京都のこれから先25年を見据えてもみんなが望むことだ。自分の仕事の関係で先ほど少し触れたが、策定の目的・趣旨というところで、世界の危機的状況の話があったが、では京都の危機的状況はどうなのかというところは、触れられているようで、これからのところでは触れられていない気がする。明らかに少子化であり、人口の流出などで人口が減っている今、世界文化自由都市宣言をこれからも継続していくために、主役である市民がどんどん減ってくるということは、やはり最も大きな問題なのではないか。ただ、京都に魅力がないかというと、昼間人口と夜間人口を比べて、京都に仕事等で来ている人が多いということなので、決して魅力がないことはない。いかに人口減少を食い止めていくかが重要である。

宗田会長

続いて牧委員に御意見を願います。

牧委員

世界文化都市宣言の「都市は、理想を必要とする」というのが大変素晴らしい言葉だと思っている。理想をどう掲げるのかということが大変重要だ。災害の観点だと、事務局から御説明もあったように、今後25年の間に南海トラフ地震は来るだろうし、もしかすると首都直下地震も来るかもしれないし、気候変動もある中、どれだけ大きな被害が発生するのかは分からないが、大変災害が多い25年間になるだろう。

新興感染症が発生するかもしれないし、その場合被害をゼロにはできないので、京都をどう再建していくのかというところが大変重要である。能登半島も大変な中、皆さんその地域が好きなので、そこにとどまって何とか頑張っておられることから、京都の良さをどんどん伸ばしていくことが、災害に対して強いまちをつくる上で大変重要だと思う。また、災害発生後はお金が必要となる。資料に企業立地促進・地域の活性化ということで、醍醐、洛西、京都南等を記載していたが、仕事があつて、そこでお金が稼げるということも災害から立ち直る上で大変重要だ。今まではずっとまちを守るということをやってきたが、そういうことに加えて、稼げる場所もしっかりと整備しておくことが重要なのではないか。

宗田会長

松井先生と牧先生から非常に重要な意見をいただいた。

それでは、プラー委員、願います。

プラー委員

5万5千人の外国籍市民が京都市で生活しているので、全人口の3%程度になる。また、留学生数が2倍に増えている中で、「伝わりやすさ」の観点はとも必要だと感じている。皆さんが発信しやすい、意見を出しやすいような取組を、ぜひ進めていただきたい。

特設サイト「みんなの理想京 ideal Kyoto」も見たが、ほとんど日本語での投稿である点が気になった。例えば日本語学校等に協力を依頼して意見を出してもらうことや、ネパールやスリランカなどの方々が働いているレストランや工場で声を拾ってあげることができると、資料にあるように、「世界中のあらゆる人々」に京都に対する親しみを持ってもらいたいと感じた。

宗田会長

確かに留学生はもちろん、インバウンドもこれだけ増えている中で、それぞれの方たちがどう見ているかということ、またそれを集めて市民に伝えるということも、これから京都の未来を考えていくうえで重要な御指摘である。

それでは、藤野委員、願います。

藤野委員

25年前の1999年というと、男女共同参画社会基本法が制定された年である。その後、2016年に女性活躍推進法なども制定され、ここまでの25年間はいわば、男女平等の黎明から様々な取組が進んできた25年だった。だが、本日示されている資料や報告では、ジェンダー平等やダイバーシティの視点が希薄であるような気がするので、次の25年を議論するに当たっては、ジェンダー、ダイバーシティ、多様性などの視点も組み込むことが重要だと感じている。

特に少子化との関係でいうと、先進国でジェンダー平等が進めば、出生率が回復している。現在、京都市でも少子化が進んでいる背景には、ジェンダーの平等が進んでいないという問題があるのではないか。少子化のこと、子育てのことをしっかりやっていくのであれば、ジェンダー問題の視点は入れる必要がある。特に日本は先進国の中でも最下位といわれている。京都市は国際都市として世界に名だたる都市でもあり、ジェンダー平等への高い関心があつてしかるべきかと考える。

宗田会長

ジェンダー平等の問題は必ずしも日本の伝統のせいではないはず。歴史や伝統がジェンダー平等の実現を妨げているのではなく、むしろ歴史があるからこそ京都は先進的に取り組むべきとの御意見かと思う。おっしゃるとおりである。続いて、福富委員の御意見を伺いたい。

福富委員

「財布のない買い物リスト」という話があったが、社会保障関係費がそのリストの大部分を占めているのは事実だと思う。更なる人口減少を見据え、いわゆる「8掛け社会」とどう向き合っていくかを考える中で、社会的に弱い人たち、排除される人たちをどう取り込みながら社会体制を構築していくのかということを、真剣に考えていく必要がある。

支援を受ける側の人たちが、ときには支援する側に回ったりすることができるよう、従来の縦割を越えた連携や仕掛けづくり、「出番」を創出していく地域共生社会をつくっていく必要がある。ここまでの話にもあったが、地域共生社会の実現に向けて京都市民の力をどう活かしていくのかという観点を長期ビジョンに盛り込んでいくことが重要である。

宗田会長

事務局の報告資料にも示されているが、この間、女性や高齢者、学生を含め、働く人の数が増加しており、それに伴い2012年頃と2023年の納税義務者数を比較すると18%ほど増加している。特に増加しているのは年収200万円未満の労働者だが、これにより福富委員が述べられたように、福祉を受けるだけではなく、支える側に回るという状況が生まれている。当然、必要な福祉を受けつつも、税や保険料を納めることはもちろん、働くことも含めて様々な形で支える側にも回っていただく。こうした大きな変化が高齢化社会の中で起こっているということが重要だ。

続いて濱崎委員にお願いします。

濱崎委員

改めて「文化」をどのように認識するのかに焦点を当てたい。文化の役割あるいは京都の役割といったものについて、今なぜそれが大事なのかというようなことが、私たち京都市民自身も分からなくなってきた部分があるので、改めて位置付けていくことができればよい。私にとって京都は、そこにいると「ほっとする」まちである。なぜ「ほっとする」のかを考えると、歴史の一部に自分がいるという安心感が得られるからなのではないかと思う。私自身、

京都での生活は大学時代から数えて30年以上になるのだが、出身は兵庫県である。つまり、外から働き、学びに来る人も、あるいは旅行に来た人も同じように感じるのではないかと思う。歴史があって、ほっとできる。京都の文化的背景には豊かな自然環境もあるかもしれない。近年、こうした京都の歴史や文化が観光コンテンツと捉えられがちだが、そういった見方ではない、真に社会生活、経済にも結び付いた文化というものが循環していることを、長期ビジョンの中で示していけるとよい。

これと関連して、「身体性」、「直観力」というキーワードも重要であり、非対面コミュニケーションが盛んになる中においてもやはり「場」が大事。対面して「そこにいる」ということの喜び、創造性、歴史的な場所や空間がもたらすインスピレーションといったものが非常に重要である。それは本当に京都ならではの良さであると思うので、そういったことをもう一度捉え直していくことができればと考える。

宗田会長

濱崎委員が館長をお務めの有斐斎弘道館での取組など、いまお話しになったようなことが少しずつ広がってきているように感じるが。

濱崎委員

取組が広がっているのは事実であるが、その一方で「集う場」がなくなってきている。「集う場があって良かった」という声も数多くいただくようになっているが、それはそうした「場」がなくなっていることの裏返しだと思っている。

宗田会長

京町家の再生もこの30年でだいぶ進んできたし、歴史的建造物の活用が一般的になってきた。この間、京都商工会議所が取り組んでいる富岡鉄斎の建物も、今は集まる場所として活用されるようになって、それが京都の市民の力、商工会議所の力で進んでいるということも非常に重要なことだと思う。

それでは続いて貫名委員に御発言願いたい。

貫名委員

近年京都を語る時に「ハレ」の部分が強調され過ぎている気がする。京都にはこんなお祭りがある、おいしいものがあるということももちろん大事なのだが、「ハレ」に対する「ケ」の部分も重要であると考えている。現行の基本構想を起草された鷺田先生が書かれた『京都の平熱』という本があるが、この

タイトルはとても良い言葉だと思う。つい何か変わったことをしがちだが、「日常の幸せ」のようなものに焦点を当てたい。

私の専門分野である環境の面からも一点述べる。京都は何を置いても地の利が強く、豊かな自然環境があつてまちができています。水があり、食が生まれ、住処が生まれ、文化が生まれたのであり、全ての基盤となっている自然環境を改めて見つめ直さなければならない。先ほど「コンテンツ」という言葉があつたが、本日の資料にある地球温暖化、生物多様性、災害、などの文言も一つひとつ重要ではあるがあくまでパーツであつて、接点の捉え方、そしてどう接続していくかという部分が重要である。

宗田会長

それでは続いて野村委員のお考えを伺いたい。

野村特別委員

委員の先生方のお話は大変勉強になる。ごもつともと感嘆しながら拝聴していた。私からは、自分の想いも含めて3点、委員の皆さま方のお話も踏まえつつ、お話し差し上げたい。

1点目。アクチュアリティなるものの重要性を強く感じている。アクチュアリティは本来は文学用語だが、この場に即して別の言葉で言い換えるなら、リアリティとフィージビリティ、つまり、本当に現実に即しているかという点と、実現可能なビジョンであるかという点が重要だと感じている。ここには、当然に、お金、つまりは予算といった金銭まわりのお話もあれば、松井先生や牧先生のお話にもあった危機管理やレジリエンスの観点もあるだろう。私は人文系の研究をしている身だが、抽象論や気合い表明だけではこの手のものは上擦って終わることを行政や経営の経験からも痛感しているので、今ほど申し上げた点は可能な限り留意したい。また、本来的にアクチュアリティなるものは、当然に人間存在そのもの、あるいは人間の日常の生活それ自体に根差したものであるところ、この点も非常に重要だと感じている。

2点目。2050年をきちんと見据えたものとしたい。たとえば、2050年には言語の壁は今とは比較にならないほど融解しているだろう。レトリックも含めて全て自動で翻訳され、ひいては、もはや非言語でコミュニケーションが成立している可能性さえある。個別の予測には限界があるにせよ、少なくとも、こういった議論が今よりも遥かに本格化していることは間違いない。また、世界の人口動態としても、アフリカや東南アジアが興隆してくる。これを踏まえれば、たとえば、今われわれが見ている「インバウンド」なるものの景色も全く違うものになってくる。人口動態は統計的にも信頼性が高いと言われてい

るが、このように未来を見据えていくことも重要だろう。

3点目。これは京都市の職員の皆さまにも何度か申し上げてきたことだが、他の自治体の長期ビジョンなどと似通わないようにしたい。みんなが賛同する総論的なものを出すと、まさに曾我先生の御示唆にもあったように、実効性以前に京都市の長期ビジョンそれ自体としての意義が失われてしまう可能性がある。京都だからこそ描けるものを、3年や5年といった短期スパンの流行・トレンドの類に容易に流されることなく、京都の真髓たり得るものを可能な限り文章に落とし込んでいきたい。また、先ほど貫名先生のお話にあったように、ハレのお話だけではなく、先ほども触れたが、ケとしての日常、ささやかな日常の中に宿っているものを、きちんと言葉にしていけたらと考えている。

宗田会長

それでは続いて、田中委員の御意見を伺いたい。

田中委員

私からは市民の立場と、本業として企業のデジタルマーケティングの伴走支援や副業・兼業人材の育成に携わる立場の双方の視点からお話させていただく。

まず、市民の立場から、私は大学を卒業後、就職で一度京都を離れたが、いずれは京都に帰ってきたいとの思いがあった。私の同世代は子育て世代なので、住まいや交通の面で「京都に住みたいけれども住めない」という声をよく聞く。住みたい人が心地良く住めるまちづくりは、次のビジョンにおいても重要なポイントになると考えている。

本業の立場からは、デジタル化というのは、長く続く企業が多い京都だからこそ取り組んでいかなければならないものであると思う。デジタル化などの観点は長期ビジョンに新しく入る部分でもあるので、しっかりと考えていくことが重要であると感じている。

宗田会長

京都のデジタル化とはどうあるべきかをしっかりと考えたい。それでは続いて高屋委員から御意見を伺いたい。

高屋委員

地域の社会福祉は社会福祉協議会も含めてコロナ禍で大きな打撃を受けた。特に少子化、高齢化の問題は深刻であり、社会福祉協議会が運営している児童館に通う子どもたちもコロナ禍を機にバラバラになってしまった。今になってようやく少し戻ってきているが、地域のつながりが希薄化した現状を重く受け

止めている。これを何とか再び繋ぎ、盛り立てていくために力を結集していきたい。京都市からの報告にもあったが次期総合計画において市民と行政の協働が重要であることは間違いない。地域コミュニティの希薄化が著しく、社会福祉協議会としても対応に窮しているところだ。単身或いは2人世帯が増えており、地域活動に協力してくれる方が1世帯に1人いるかどうか。かつてのように協力を得られなくなっており、町内会に入っていなければ、そもそも協力を得ることができないという状況だ。地域福祉を支える立場として、我々は様々な部分でコミュニティの力を借りなければならない。こうした視点も長期ビジョンの中に含めていただいきたい。

宗田会長

地域社会、コミュニティに関しては真剣に取り組んでいく必要がある。本日の資料にも単身世帯の割合が現在52%となっているというデータが示されており、今後もその割合は高くなっていく予想である。実態として一人になっていたとしても、本来人はつながりを必要とする。年齢や性別を問わず単身世帯化している状況の中で、かつての家を単位としてつながる地域から、個人がつながるコミュニティにどうシフトしていくかということだと思うが、難しい問題である。社会福祉協議会はまさに正面の現場なので、人のつながりをどう再生するかが重要ということである。

続いて鈴鹿委員から御意見を伺いたい。

鈴鹿委員

「分断」というものが最も危機感を持つべきものだと考える。まず、子育て世帯の流出が起こる背景にある分断である。京都市には人を惹きつけるコンテンツがあり、子育て世帯にとって魅力となるものも多い。しかし、様々な施策、対策は文化に興味がある人に向けたものとなってしまうっており、子育て世帯に対して効果的に作用していないと感じる部分もある。そして、すでに指摘があったように、京都に住みたいが住めないという問題は、経済面の問題もかなり大きい。子育て世代の流出を食い止めたければ、そういう部分もきちんと見なければならない。

次に経済的側面から生じる分断である。これは、文化のことではなくて、生きること必死にならざるを得ない状況が作り出しているものであり、全体を見るうえで忘れてはいけないところだと思う。子どもの貧困が京都市内でも大きな問題になっているが、例えば、子ども医療費が1,500円から200円になるだけでも随分助かったという子育て世帯は多いし、インフルエンザのワクチンにしても、高齢者が1,500円で接種している隣で、小さな子どもが

7,000円くらい支払って摂取しているという状況。こういう細かいところが積み重なることによって分断が生じてしまう。実際の生活に焦点を当てていかなければならない。

もう一つの分断が、観光客と市民の分断である。観光がなければ財政が成り立たないというのは、コロナ禍を経て改めて感じていることかと思うが、観光客が増えて暮らしにくくなったという市民が増えるとうとう対立構造が生まれてしまう。市民が対立姿勢を強め歓迎されなくなると、観光客も減ってしまう。他方で、自分たちが大切にしてきた暮らしを侵害されたくないという市民感情にも留意すべきだ。

京都というまちで様々なものが長く続いている秘訣は何かということ考えたとき、フレキシビリティ、すなわち常に動いていて柔軟性があること、そして、他者を侵害せず尊重するということの2点なのではないかと思う。この2点が京都で守られてきた結果として、分断を回避し多くのものが長く続いてきたのだと思う。長期的なビジョンにおいてもこの2点を意識する必要がある。

子育て世帯に関してのことは、私自身も子どもが生まれるまで一切知らなかったことで、自ら直面しないと分からないことがたくさんあると感じている。課題に直面している人の意見を聞いて、細かいことから対応していくことが重要である。

宗田会長

市民意見の集め方にも、まだまだ工夫が必要である。単にウェブ上でということだけでなく、多様な機会をつくっていききたい。

続いて阪部委員の御意見を伺いたい。

阪部委員

LGBTや性的マイノリティーという視点から、今現在、国では施策がほとんど動いていない状況である。昨年、LGBT理解増進法が制定されたが、現実社会としてはほとんど動いていない。そのような中で、各自治体でパートナーシップ制度をはじめとした施策が徐々に広まっているが、京都市と関わっている中で強く感じるのは、市民参加を大切にしているというところである。現在も性的マイノリティーや性の多様性に関する当事者団体や民間企業がネットワークをつくり、取組を開始しているが、国の施策がなかなか動かない中で生きづらさを感じている方がまだまだたくさんいるので、多様なまち、京都らしさという魅力をさらに伸ばしていくために、そういった方の声を拾いながら進めていければと思っている。

宗田会長

続いて、小川委員の御意見を伺いたい。

小川委員

私からは3点述べたい。まず1点目は「まち」という概念をどのように刷新するかが重要だということである。まず、従来のまちの姿として、ネイバーフッドとか、地に足が着いた居心地のいい京都というものがシビックプライドにも密接に関係しているという側面がある一方で、デジタル化が進展する中で人口はますます流動化し、バーチャル市民であるとかファンエコノミーみたいなものが京都を動かしていくことは間違いないので、そういうネットワークの拠点となることも含めて、今後の京都をどう考えていくのかということが重要である。また、18歳以下の人口が激減していくと、縮小或いは閉鎖していく大学も増えていくだろうし、そうすると「学生のまち京都」も打ち出していくことが難しくなる。こうした点も考慮して京都というまちをどういう範囲で、どういうものとしていくのかを考える必要がある。

2点目は、他の自治体との差別化を考えることの重要性である。私は鎌倉市のスーパーシティ構想の関係で建築分野の人たちと共同研究していたことがある。古都に関する検証という点では、京都と鎌倉は非常によく似ている。鎌倉もオーバーツーリズム、環境、防災、そして心地良さ、古都であることの誇りのようなものとか、伝統と革新みたいなことが列挙されていて、自治体名を伏せて見れば、おそらく京都のことを言っているのか、鎌倉市のことを言っているのかからないのではないかと思います。この点注意が必要である。

3点目は、流行り言葉を安易に用いないということである。「関係人口」などの文言もおそらく2050年には古びてしまっているだろうし、もしかしたら「オーバーツーリズム」であるとか「ネイバーフッド」とか、今盛んに使用されている言葉は使われなくなる可能性が高い。むしろ鷺田先生が用いられた、「めきき」とか「たくみ」とか「こころみ」といった、平易かつ京都市に馴染みのある言葉から、新しい概念を立ち上げていけたらよいと思う。

宗田会長

続いて、赤松委員の御意見を伺いたい。

赤松委員

資料にも「京都芸大を核とした新たな拠点づくり」と記載されており、また本学が掲げてきたテラスという言葉まで使っているところで、大変重い責任を改めて感じたし、我々としてはその責任を果たしていきたいと考え

ているところだ。京都市立芸術大学は、実はもう10回目の移転で、今回は崇仁地域のことや設備の老朽化、そして何より学生のことを考えての移転だったが、空港も港もない京都にとっての交通の要である京都駅の真横にアートスクールが全面移転することのインパクトは大変大きかった。オペラハウスや有名な美術館を京都駅の横に持ってきたのではなくて、まだ価値の定まらない芸術家の卵たちを生み出す大学がまちの中心にあるというのは、実に京都らしいことだと、まさしく京都の態度表明だとの声もいただいている。

移転以降、海外からの視察も増えた。今回の移転が、芸術が京都というまちの核であることを示す形になったのではなかろうかと思うし、先ほどから出ている世界文化自由都市宣言にも謳われる文化や自由を内包する芸術が中心にあるというところで御納得いただけたのではないかと感じている。

本日の議論で度々出た人口減少の話だが、学生が大学卒業後に外へ出ていくという課題がある中、芸術に関しては、私もそうだが、多くの学生が市外からやって来て、そしてアートをやっていくには魅力のあるまちということで、京都に残るケースがかなり多い。私たち教員の中にもそういう人たちがいるし、卒業生にも多い。若いアーティストを支援するというのも京都ならではの施策であり、特に近畿圏周辺を見てもそういうところはないので、それを京都の魅力として打ち出していくことで若い人たちも残ってくれるのではないかと。さらには、京都に残った若い芸術家たちが、例えば小中学校で子供たちに芸術を教えるなど、何らかの形で一緒に取り組んでいける方策を考えて行くことが私たちの責任の果たし方になるのではないかと。

宗田会長

過去25年間に京都は歴史や文化、自然を大切にするまちとして醸成されてきたので、ここでようやく芸術を、それも駅前で語ることができるような状況になってきた。さらにそれをもう一歩進めようという段階である。

それでは最後に改めて、曾我副会長、安保副会長からも御意見を伺いたい。

曾我副会長

長期ビジョンがポエムのようなものになってしまっはいけない。やはりそこに書かれている将来像を実現すること、そして実現すべくどのような手を打っていくのかを考える必要がある。そのための議論に当たってはもう少しデータが欲しいと感じた。例えば京都の経済がどうか、産業構造はどうなっているのか、あるいは格差の問題というのは社会が抱えている大きな問題だが、平均所得がこうなっていますというところに止まらず、どのような分布になっているのかなど、もう少し詳しく見ていく必要がある。

安保副会長

現行基本構想に示された「本物の時間を追求する」という表現について、「本物」であることに拘る部分というのが、「場」であり、たとえデジタル空間に移ったとしても、本物を追求し続けるのが京都なのだと感じる。

また、人のニーズはすごく多様で、一括りに若者といっても、様々なことに挑戦したい若者もいれば、悩みに悩んで閉じこもっている若者もいる。世代の幅も非常に広い中で、「本物を追求する」ことを長期ビジョンの中でどうまとめ上げるのかというところは極めて難しいことだと思う。起草を担う野村委員にプレッシャーをかけるようだが、多様性なくして未来はなく、その多様性をひとつの都市としてどのように体現していくのかという難しい点を、皆さんと一緒に追求できればと思っている。

宗田会長

本日御欠席の委員の御紹介と事前に承っている意見を、事務局から報告いただきたい。

○事務局から「資料７ 第１回審議会欠席委員の御意見」を紹介

宗田会長

それでは意見交換が一巡したので、最後に松井市長におまとめいただきたい。

松井市長

本日は、数々の貴重な御意見をいただき心から感謝を申し上げます。

私が強調しておきたいのは、この度の諮問は、従来の基本構想と基本計画を単純に組み合わせたものをつくるためのものではないということだ。長期ビジョン策定に当たっては、委員の皆様に、理想だけではなく我々の背中を押してくれるような価値、そして守るべき価値も含めて御提示いただきたい。その価値を受けて我々は、理想と現実の架け橋をつくっていく。それは行政だけの役割ではなくて、どのように市民と対話をしながら進めていくのかという点に難しさがある。情報が氾濫している現代において、今の構想と基本計画を単に合わせたものを作っても多くの人は咀嚼できないし、市民に共有するというのも無理だと思う。従って簡潔なものを作りたい。

本日の議論では、切実な課題も数多く提示された。世界中からこれだけ注目されていて、光を見出していただけっているという意味では、京都のまちはとても輝いているし可能性に満ちているが、一方で課題が少ないということでは決してないと私自身思っている。切実な課題というものをしっかり受け止めなけ

れば、これは宙に浮いたもの、曾我委員のお言葉を借りるとすれば「ポエム」になってしまう。しかし、足元の課題に対する対策をあまりに細かく書いてしまうと、それは長期ビジョンにならない。本日の議論にもあったように、現在の言葉で、足元の課題に引きずられてしまうと、2050年にきちんと伝わるものにならない。したがって、課題と対策というところに網羅性を求めてはいけなと私は考えている。そういう意味では、「網羅性」という言葉について皆さんに誤解なくお伝えしなければいけないのは、ある種の分野としてのバランスとか大きな分野を捉えるという意味の網羅性であり、個別の政策メニューを網羅するということではないということである。「あれが書いていない、これが書いていない」という細かい議論は、問題意識としては非常に重要であるが、それは長期ビジョンではなく、同時並行で進めている新京都戦略などに反映させていくべきものと考えている。私の任期の中で何を成すかということは、当然この長期ビジョンを受けて考えていくべきものであり、毎年度の施策、事業についても、長期ビジョンを常に意識し、ときには長期ビジョンに箍を嵌められ、或いは背中を押されながら、市会とも議論しながら決めていきたい。

本日、委員の皆様方から提示いただいた課題認識はすべからく重いものであり、これを基本構想ぐらいの分量でどうまとめていくのか。しかも25年先にきちんと、この時はこういう議論をしっかりとしていたのだということを受け止めていただけるようなものをどう作っていくか、野村委員の筆力に期待したい。そのために我々京都市としてもさらに詳しいデータや現状認識を提示していくし、委員の皆様の御知見にも期待している。

もちろん、審議会からの答申だけで長期ビジョンが出来上がるわけではなく、若い世代の方々の御意見も聞く必要があるし、市民との対話の場も設けながら、最終的には来年秋を目指して作業を進めてまいりたい。私自身も、審議会にはできうる限り出席をしたいと考えている、これから長丁場になるが、今後も活発な御議論を期待して、本日の御礼に代えさせていただく。

(6) 事務連絡

宗田会長

本日の御意見と、追って開催される京都未来共創チームの会議の議論も踏まえ、第2回審議会において審議を深めたい。以上を以て、第1回京都市総合計画審議会を閉会する。

3 閉会

(以上)